

孫文の研究

——とくに民族主義理論の發展を中心として——

藤井昇 三著

一九六六年四月 勁草

書房 A5判二八六頁

一九六六年は孫文の生誕百周年にあたっていて、そのせいか昨年
から今年にかけて、いくつかの孫文研究書や傳記が出版された。筆
者の知るかぎりでも、鈴江言一の名著「孫文傳」が復刊されたのを
別に、野澤豊「孫文と中國革命」、岩村三千夫編「現代中國と
孫文思想」、貝塚茂樹「孫文と日本」、それに藤井氏の本書がある。

これらの著書は、いずれもそれなりに孫文と現代とを結びつけ、そ
の歴史的位位置のみならず、今日的意義をも明らかにしようとする努
力しているが、とりわけ藤井氏のものは、孫文の民族主義理論の轉換
を、日本觀を中心に検討するもので、日清戰爭以來の日本帝國主義
の中國侵略という汚辱にみちた歴史をもつわれわれにとって教えら
れるところが多い著書である。また學說史的にいつても、著者のい
われるように、孫文の民族主義理論を系統的・學問的に研究したも
のが少ないのであって、その意味で本書のもつ價值は高いといえ
る。

さて著者は、本書において孫文の民族主義理論は一九一九年の南
北和平會議を轉期として、とくにその日本觀の變化から轉換しはじ
めるという新説を提出しておられる。もとより筆者には、これが正
しいかどうか批評する力はない。それにはもっと適當な方がおられ

るであろうが、一應の紹介を行い、あわせて二・三の疑問點を提示
して責をふさぎたいと思う。

まず本書の構成はつぎのようになっている。

序 論 問題の所在

第一章 第一次世界大戰までの孫文と日本

第二章 一九一九年の南北和平會議と孫文の民族主義の轉換

第三章 轉換後における孫文の民族主義の展開

第四章 一九二四年の孫文の訪日と大アジア主義講演

結 論

第一章は一九世紀末から第一次世界大戰までの孫文の民族主義理
論が日本との政治的關係を中心に論じられる。ここでは著者は孫文
が、清末の時期にあつては清朝打倒のために、第二革命の失敗以後
は北洋軍閥打倒のために、終始一貫して日本の精神的物質的援助を
もとめ、そして、その折々に中國侵略をもくろむ日本の支配者たち
と一時的な妥協をよぎなくされた一連の活動を概観する。著者は孫
文のかかる對日接近の全貌を未公刊の外務省文書などを使って、實
證的にあきらかにする。たとえば第二辰丸事件を契機とした第一回
對日ボイコット（一九〇八年）にたいして孫文はきわめて冷淡な態
度をとる、日本側のボイコット鎮壓に一役がおうとしたこと（五二
―五四頁）、南京で臨時大總統に就任後、日本にたいし積極的な借
款交渉を行い、その條件に中國全土における鑛山・鐵道・電氣事業の
優越權を與えようとしたこと（六八―七三頁）、一九一四年、第二
革命に失敗して日本に亡命中、大隈首相に手紙を出し、袁世凱打倒
に協力するならば、領事裁判權撤廢を條件に日本に市場を開放し、
同盟を結んで關稅を免除せんと提案したこと（八五頁）、さらにまた

翌年の日本の二十一カ條要求にたいし、孫文はこれを「妥當な措置」と支持するとともに、「中日盟約案」なるものを作成して政治・軍事・外交・經濟の面での日本の全面的優位を承認するがごとき提案を外務省外務局長に行っていること（八五〇八頁）、などが明らかにされている。ここにしめされた諸事實は、孫文の外國依存と自國民衆輕視の態度を一層うきほりにするものであって、北一輝が「賣國奴」として孫文を痛烈に批判した點でもあった。

第二章は、このような外國依存と自國民衆輕視の態度からぬけきれなかつた孫文の民族主義理論がどのように轉換していったかを検討する。さきにもふれたように、本書の最大のポイントは、この民族主義理論の轉換を一九一九年の南北和平會議における日本觀の變化におくことにあり、この章が本書のかなめとなつてゐる。著者は舊民主主義革命の指導者としての時期から新民主主義革命の積極的參加者としての時期への轉換は、五四運動を轉機とすることは認めつつも、民族主義理論については南北和平會議も思想的轉換を促した重要な一因であるとのべている。そしてこの民族主義理論の轉換は、日本にたいする見方においてはじまつたというのが、著者の見解である。著者はつぎのようにいう。

一九一七年に發表された「中國存亡問題」という論文において、イギリスの中國政策を批判する一方、日本の立場を辯護し、日本との提携を主張していた孫文は、一九一九年六月になると、山東問題をとりあげて、日本の帝國主義的侵略政策に強い批判を加えるにいたる。二年間のあいだに、かかる變化をひきおこしたのは、一九一八年から一九九年にかけての南北和平會議における日本政府の態度であつた。一九一八年のはじめ、國內にも南北和平をのぞむ聲がしだい

にたかまりつつあつたころ、孫文は、國內統一の方法として武力による統一か、それとも和平會議による南北統一かを考えていた。しかし孫文としては和平會議による統一は不徹底かつ一時的なものに終ると豫想し、むしろ武力による統一をのぞみ、日本の援助に大きな期待をかけていた。ところが寺内内閣は、前年以來段祺瑞政府に西原借款を交付するほか、三千二百萬圓の兵器借款を供與し、一九一八年五月には日中共同防敵軍事協定を結んだりして、ますます援助政策を露骨に推進しつゝあつた。こうして孫文の要請は寺内内閣によつて拒否されたのであるが、孫文は九月に成立した原内閣に期待をかけた。ところが原内閣はいままで拒否していた南北和平會議に賛成する態度をとり、事實上、日本の提案によつて五ヶ國による和平勸告が出される情勢が生まれた。和平會議開催が必至とみるや、孫文は原内閣に働きかけ、日本のイニシアチブで護法を前提とする舊國會の回復をはかるよう要請することにした。孫文が日本に南方派援助の代償に滿蒙割讓を提案したのはこのときのことといわれる。しかし、いったんは和平會議開催に賛成はしたものの、このままでは舊國會の回復は不可能だと判斷した孫文はふたたび武力統一の方針をうちだし、十一月以來、三回にわたつて日本の援助を要請した。ところが、原内閣は五ヶ國共同勸告に加わるとともに、孫文の援助要請を拒否する回答を出した。それでもなお孫文は原内閣にたいする期待をもちつづけていたが、年末から一九一九年にかけて原内閣が北方派援助——軍事協定延長・參戰借款供與・參戰軍編成など——をひきつづき實行するのをみて、ついに孫文は一九一九年六月十三日の「東京朝日新聞」の記者の質問にたいする答へのなかで、二十一カ條要求以來の日本の帝國主義政策をきびしく批判し、

十月には中國人學生にむかつて日本からの脅威を警告するにいたる。(救國急務)そして同月、宮崎龍介との會見において、孫文は自己の從來の革命方式を徹底的に自己批判し、民衆の基盤の強化を今後の革命路線の中心的課題とみなし、日中兩國の民衆的部分の結合を強調するまでになった。ここに、從來のような外國依存と自國民衆輕視の缺陷は克服されはじめたのである。

以上が第二章の主要な論旨である。

さて第三章では轉換後の孫文の民族主義理論が、どのようにして、新三民主義の段階にまで到達したかが検討される。まず一九一九年六月の日本批判にはじまる反日の態度は、前述の「救國急務」なる演説において二十一ヶ條廢棄を提起するまでに發展し、一九二〇年になると、中國侵略を助けてきた日英同盟の更新にたいする反對、安直戰爭における日本の張作霖援助にたいする抗議というように、ますます激しさを加え、同年末の宮崎滔天宛の書函では、日本軍閥の中國侵略政策を是正せしめるよう要請するほどであった。こうして日本の中國侵略に眞向から反對し、それと同時に日本の民衆的部分との團結をめざしつつあった孫文は、五四運動の成果に學んで、國內民衆にたいする宣傳と革命への組織化を重視し、その實行にとりかかった。一九二二年には「軍人精神教育」なる講演を行つていて、これは著者によると「連ソ・容共」政策直前の思想の到達點をしめすものであるという。ここには、民族主義は國際間の民族の不平等を打破することであるとする反帝國主義の立場が明確にのべられ、列強のアジアにおける行動、とくに中國にたいする不平等條約をきびしく批判する一方、「政治革命と社會革命を同時に並行して行つた」ソヴェエトにたいする思想的共鳴が語られていて、一九二

三―二四年における革命路線の歴史的轉換を必然ならしめる基盤がすでに形成されていたと著者はのべている。この「連ソ・容共・勞農援助」の三大政策がとられる時期の孫文の日本觀は、一直線に反日へとエスカレートしたのではなく、日本を國內的には獨裁國家、國際的には侵略國家と規定しながらも(ニューヨーク・タイムス記者、ブロックマンとの會見)、日本への親近感はずてきえず、犬養の入閣にたいする期待が裏切られてはじめて、日本人への親近感と日本を中心とするアジア民族復興の願望とはしだいに消滅していく。それは、孫文最後の訪日において犬養との會見すら拒否されたときである。

さて第四章は、この孫文の訪日と大アジア主義講演についてのべているのであるが、著者は大アジア主義の講演にこそ孫文の民族主義理論の到達點があるという。孫文の大アジア主義講演は從來から、さまざまの評価を與えられているが、著者は、孫文の訪日以前の行動と發言をたねんにトレースし、特使李烈鈞を派遣してあらかじめ日本の世論を打診するなど孫文の訪日がけつして突然のものではなかったことを證明している。そして孫文の訪日の主要な動機は、日本國民の對中國感情をはだで感じとり、日本國民に不平等條約廢棄の要求を理解してもらい、その支持と同情をうるにあったことを明らかにしている。

以上、各章の内容をごくかんたんに紹介したのであるが、筆者の疑問點を二・三のべ、御教示をおおぎたいと思う。

まず第一は本書の主題である民族主義という言葉についてである。著者は「民族主義」という言葉をいかなる意味で使用しているのか、一向に不明確である。たとえば、「清朝の絕對主義に正面

から挑戦する民族主義革命」(一三頁)、「滅滿興漢・民族獨立を第一の目標とする民族主義者孫文」(五五頁)、といった用例があるかと思うと、「反帝國主義的民族主義」、「帝國主義列強に對して民族としての自由と平等と獨立を要求する民族主義」(一九七頁)、「かように民族主義と反帝國主義及び世界主義を統一的に把握し」(一九八頁)のような例もあり、「民族主義」という言葉がふくむ内容は少しづつずれている。これは孫文自身の「民族主義」にたいする理解が變化し、發展していったことと關連するのであるが、著者はそのことには全くふれておられない。同盟會時期の「民族主義」は、清朝にたいする漢人の鬭争を表わしているのであり、これと後の反帝國主義を意味する「民族主義」と同列において、その發展・變化を論ずることは可能であらうか。あるいは著者には一定の見解があつて、辛亥革命を民族主義革命と規定しておられるのかもしれないが、それならば、どこかでふれてしかるべきであるし、ブルジョアの民族解放の理論ということで使用しておられるならば、それなりの説明がなければならぬ。かかる意味での「民族主義」という言葉は、現在のところわれわれの共通の言葉にはなっていないのであるから。

第二の問題は、本書のメリットである孫文の民族主義理論の轉機を南北和平會議におく説についてである。筆者には、これについてなら積極的な意見があるわけではないが、素人考えをいわせてもらうなら、著者の實證をすべて認めたとしても、はたして孫文の民族主義理論の轉換の主要因を南北和平會議における對日接近といった政治接衝の挫折におくことができるか、という疑問がどうしてもわいてくる。とりわけ中國革命の展開と深化のなかで孫文の思想的

發展を理解しようとするなら、かかる對日接近の失敗は、從來から孫文の經驗してきたところであり、それが一九一九年の六月という段階にいたつて、なぜ日本の帝國主義的侵略政策批判にすすみ、さらに帝國主義列強一般にたいする批判へと發展していったか、ということを明らかにする必要があるのではないだろうか。五四運動との關連をふくめて検討される必要があるように思われる。

第三は、孫文の帝國主義にたいする理解の甘さなり、それとの妥協的態度をどのように評價するか、という問題である。著者は第一章において孫文が日本の革命援助にたいして廈門や滿洲などの領土を委譲したり、割譲したりすることを提案したことについて、當時の中國をめぐる内外の情勢、たとえば中國が清朝の絕對的支配下にあり、また帝國主義の半殖民地という劣惡な國際的條件におかれていたことや、孫文自身に民衆と結合する條件がなく、當時、孫文にとつては清朝を打倒することが最大の問題であつて、そのためにはやむなく外國の勢力を借らざるをえなかったとして、その外國依存を辯護しておられる。たしかに、時代的・階級的限界ということでは、これらの孫文の對外姿勢を説明することは可能であるかもしれない。しかし、それと孫文の妥協的態度の評価とは別の問題である。著者は孫文の外國依存を批判する者にたいして、孫文を辯護するに急なために、その客觀的評價まで放棄されているかのごとくである。著者の態度はあやまった歴史主義的觀點ではないだろうか。筆者は孫文のかかる反帝國主義的觀點の缺落を正當に評價することは孫文の不撓不屈の革命家としての本質を少しも歪めるものではなく、むしろそうしてこそはじめて晩年における革命路線の轉換のもつ重大意義が明らかになると考えている。それから、これと關連して

著者が一九〇五年から七年にかけて、革命派と立憲派との間に展開された論争、たとえば外資問題とか分割論争に少しもふれていないのは奇妙としかいえない。このことは、本書があまりにも孫文個人の思想的發展に力點をおきすぎ、孫文をとりまく人々との關係について、ほとんど言及していないことと關連がある。黃興や章炳麟、宋教仁などの革命派のなかで孫文がいかなる位置にあったかは、孫文の思想を考える上でたいへん重要だと思われる。また晩年における中國共產黨の影響についてもほとんどふれずして、著者のいう新民主主義革命の積極的參加者たる孫文を理解することが可能であらうか。この意味で、筆者には中國革命の展開と深化のなかで孫文の民族主義理論をとらえるという著者の意圖はかならずしも成功しているとは思えないのである。

第四は方法論の問題である。これについては二つの面からふれておきたい。第一は、著者が李鴻章への上書及びハワイ・香港の兩興中會宣言に三民主義の萌芽があるとされる點である。著者によると興中會宣言の「堂々たる華國にして列國と同列に置かれず、濟々たる衣冠、異國に輕んぜらる」とか「庶くはわが子々孫々、或いは他族の奴隸たるを免れんか」という語句は民族主義に連なるものであり、「智愚を連ねて一心とし、遠近を合せて一德とし」とか「本會は年を按じて辦理人員を公舉すること一回。……およそ一事を舉辨するには、必ず會員五名、董事十名を齊集し、公議妥善、然るのち施行す」などの語句は民權主權の萌芽であり、李鴻章への上書に「人能くその才を盡し、地能くその利を盡し、物能くその用を盡し、貨能くその流を暢ぶ」とのべ、興中會宣言に「大利を興して以て民主を厚くす」「必ずやわが中國四億の生死をしておのおのその

所を得しむ」とあるのは民主主義のひな型だという（二一頁）。同様の論法は、同盟會の對内綱領の「自由・平等・博愛」を不平等條約廢棄要求の思想的起源だという主張にもみられる（二三三頁）。たしかに語句の上からだけみていれば、あるいはその通りかもしれないが、思想を實踐からきりになしてしまつて、語句の類似や、そのなかにふくまれる論理の可能性からだけ、演繹するのは思想史研究の方法からはずれたものではないだろうか。李鴻章への上書にある「人能く」云々は官僚たちの常套語句であつて、これをしも民主主義というのであろうか。第二は、「武昌革命の成功に與つて力のあつたのは、列國の中立的態度である」とする主張である（六二頁）。これは筆がすべったとも考えられるが、辛亥革命の成功が新軍の兵士などの中國人民の力によつてかちとられたことを否定されるのであろうか。もし著者が、國際關係に力點をおいてのべておられるのだとすれば、それは古くさい勢力均衡論のむしかえしにすぎない。

以上、ながながと疑問點をあげたが、これによつて本書のもつ價値は少しも減ずるものではない。本書には里井彦七郎氏も指摘されているように（「大安」一九六六年八號）、孫文の思想發展を、われわれ現代に生きる日本國民がいかにうけとめるべきかという、すぐれて實踐的な觀點が一貫してつらぬいていて、著者のかかる學問研究の立場は、われわれをつよくひきつける。

一九六六年十一月十二日、プロレタリア文化大革命が怒濤のように進行しつつある中國では、紅衛兵をふくむ一萬餘の人々が參加して、この偉大な革命の先驅者を記念する集會が開かれているし、わが國でも、東京・大阪における講演會など多彩な記念行事が行わ

れ、最後まで日中兩國人民の友好と團結を説きつづけた孫文を記念した。これらの事實は、多くの人々にとって、孫文は過去の偉人ではなく、まさに、現代に、生きてゐる。革命家であることをしめしている。それゆえに孫文研究家は、彼の歴史的位位置ばかりでなく、その思想と行動のなから、われわれは何を學び、何をうけつづべきかという、孫文の現代的意義をも明確にする責務がある。とりわけ、今日のわが國はアジア侵略にのりだそうとしており、それとともに、ますます反中國の風潮がつよまりつつある。この重大な時期に、著者が中國民族の獨立と發展を勝ちとるために全身をなげうって闘い、いくたの挫折を経ながらも、ついには日本をはじめとする帝國主義列強の本質をみぬき、これと對決するとともに、人民間の團結を達成する方向に突進していった孫文の思想と行動を、實證的に明らかにされたことは重要な意義がある。著者は最後にこうのべている。「われわれは日本帝國主義が中國民衆の腦裡に刻み込んだ恥ずべき霸道の歴史を顧みて徹底的な悔悟と反省の上に立つて、帝國主義および封建主義の抑壓からの中國民族の解放、さらに全世界の被壓迫民族の解放という先覺者孫文が達成し得ずして終った目標へ向つて今や着實に前進しつつある中國の據つて立つ革命的基盤とその歴史的必然性を正當に理解し得ないならば、日中兩國の眞の民衆的提携は永久に望むことができないであらう。」

反中國の風潮にあおられて、現代中國を生みだした歴史的社會的條件を無視する皮相な中國理解がはんらんしている現在、孫文を通して、いまいちど中國近代史の苦難にみちた發展過程を考えてみることは、われわれにとってきわめて重要なことである。著者もまた、そのことを念願して、この書を公けにされたにちがいない。本

書は、孫文の研究と題されてはいるが、日本帝國主義中國侵略史の研究という側面をもつとともに、現代中國に脈々として流れている反帝民族解放闘争擁護の立場の歴史的形成をもあきらかにしていることを指摘して筆をおきたい。
(藤田敬一)

The Dynastic Arts of the Kushans.

Rosenfield, John M.

California, University of California Press,
1967. xliv, 377 pp., XVI pls., 167 figs.

著者 J・M・ローゼンフィールド氏は、現在ハーバード大學ファーク美術館東洋美術部研究員である。一九五六―五七年に、イランとインドに旅行し、一九六四年には研究のためしばらく京都に滞在されたことがある。本書は著者がハーバード大學の美術學科で、B・ローランド教授の指導のもとに、一九五五年からはじめた研究の成果である。「クシャンの王朝美術」というタイトルは、けつして「クシャン王朝の美術」のみではない。

一九五三年にアフガニスタンのスルフ・コタルの遺跡でめずらしい白色石灰石の影像の發見があつた (Fig. 120)。正面主義をとるかたい表現の彫刻で、不幸にして頭部が缺損しているが、長い上衣とズボンをつけ、ブーツをはく、いかにも北方人らしい服裝で、これがクシャン人カニシユカ王の像と判斷された。ところが、これにもっとも類似するものが、既に中インドのマトゥラーで發見されている。カニシユカの銘のある肖像である。佛教美術の觀點からい